



第1会場● 2F 第4研修室

■司 会／小倉 史朗 熊本県生涯学習推進センター 社会教育主事
本村 信幸 長崎市社会福祉協議会地域福祉課

分科会の進め方

10:45～10:50

1 都市と地方を結ぶ若者の新しい生き方「緑のふるさと協力隊」 10:50～11:20

野崎智恵子（福岡県築上町）築城町役場住民課健康増進係 保健師

「緑のふるさと協力隊」事業とは何か？隊員は集落に一人暮らしをし、近所付き合いを含めて地方を丸ごと体験する。期間は1年、生活費は月に5万円。発表者は土を起こし、種をまき、自分の野菜を育て、地域の祭りやイベントに参加し、共に食べ、共に汗し、共に語った。発表者の派遣期間は終わったがそのまま築上町に残った。農業を知らない都会の若者がなぜ田舎に残ったのか？「緑のふるさと協力隊」は若者の生き方を変えることが出来るのか？

2 「ブックファースト」から「ブックセカンド」へー就学前に絵本に出会うためにー 11:25～11:55

勝部美枝（鳥取県大山町）大山町教育委員会幼児教育課 司書

6ヶ月の乳児が絵本と出会う「ブックファースト」事業のフォローアップとして、3歳児に絵本を手渡す「ブックセカンド」事業を構想した。図書館・福祉保健課とタイアップした子育て支援・読書推進事業で、文科省の実践研究補助事業「読む・調べる」習慣の形成を念頭においた実践でもある。幼児教育課として管轄する保育所の読書環境整備や家庭への読み聞かせ提唱など、就学前の読書推進に重点をおいている。

3 熟年期の「クラブ活動」勧誘プログラム「団塊の世代よ集まれ」事業の目的と方法ー 12:00～12:30

田中隆子（山口県下関市）「高齢社会をよくする下関女性の会（ホーモイ）」代表

竹本篤史（山口県下関市）下関市社会福祉協議会

下関市社会福祉協議会と「高齢社会をよくする下関女性の会」の共催事業である。熟年者が退職を機に「会社人間」から「地域人間」に移行できないという問題を重視し、地域参加の契機として既存の各種団体に呼びかけ、大学での「クラブ活動勧誘方式」を応用した大会を2年継続して来た。まずは、関係者・関係機関の交流が深まり、それぞれの興味・関心・プログラム創造への問題意識などが大きく変わった。